
彼女の嫉妬

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の嫉妬

【Nコード】

N1483M

【作者名】

瑠璃

【あらすじ】

（まったく）

レイフォンを意識する様になってから良く使う言葉を心の中でつぶやく。

フェリの視線の先――10m――ほど先には、仲良く二人で歩くレイフォンとリーリンの姿がある。

（まったく、わたしはいたい何をしているのでしょうか？）

フェリ視点の話です

（前書き）

初投稿

フェリ視点Onlyのはずです。

時間軸は基本無視、それでもよい方はどうぞ

（まったく）

レイフォンを意識する様になってから良く使う言葉を心の中でつぶやく。

フェリの視線の先 - - 10 m - - ほど先には、仲良く二人で歩くレイフォンとリーリンの姿がある。

（まったく、わたしはいたい何をしているのでしょうか？）

暇なので何か雑誌でも、と雑貨店に入る直前で想い人の姿を目の端で捉えたと思ったたらその想い人は女連れで歩いていたので何故か物陰に隠れながら尾行すること15分。何度かもう止めようと思ったのだがその度に楽しそうな笑い声とかが聞こえてくるのだ。

（あの馬鹿は何をそんなに楽しそうにしているのでしょうか？）

心の中にもやもやが溜まっていく。

念威を使えばいくらでも探りを入れることは出来るのだが念威操者の念威の私的利用は禁じられている。

そう簡単に見つかるつもりはありませんがあの馬鹿に感づかれると厄介です。

何せレイフオンは普段でもツエルニの武芸者とは比べ物にならないほど鋭いのだ。

いつそのこと声をかけてやろうかと思わないことも無いのだが、そのせいで気まずい雰囲気味わうのはゴメンだ。

（なんだかイライラしますね）

本気で念威を使おうと錬金鋼に手を伸ばしたとき。

『じゃあまたね、リーリン』

声が聞こえた。

（これはチャンスです）

一方的につのったイライラをぶつける為に物陰からだと、リーリンがいなくなるのを図った様にニーナが出てきた。

（・・・・・・・・・・ッ）

ニーナと目が合いそうになり慌てて隠れる。

これはもう本格的に念威しかありませんね。

即座に錬金鋼を復元し念威端子を二つ解き放つ。

すると直ぐに脳内に二人の会話が流れ込んでくる。

『あれ？どうしたんですか先輩』

『いや、特に用はないが姿を見かけたからな』

『はぁ・・・』

『そ、そんなことより。なんだか嬉しそうだが何かいい事でもあったのか?』

ニーナはあえて聞いたが第十七小隊の人間ならその理由は大体分かる。

『いい事、ですか?・・・リーリンと和解できたのはもちろんいい事ですけど、やっぱり養父さんに許してもらえたのが大きい、ですな』

『そうか。・・・ハーレイが言うには持っている錬金鋼を全て刀にするそうだな』

『はい、何だかんだ言ってもサイハーデンは刀ですから』

レイフオンはツエルニに来た時に比べれば武芸に対する考え方が変わっている。以前は武芸を強制される事に対して嫌悪感を抱いていたが、今では積極的に、とまでは行かないものの、ことさら武芸を嫌っている事はなさそうだ。

『すまない、私はこれから買い物があるからな。失礼させてもらう』

『あ、なら荷物持ちでもしましょうか?』

『いや、いい』

そういつてニーナは商店街の方に歩いていった。

（今度こそ）

動こうとした瞬間、念威が三人の少女を捉えた。

（確か・・・）

ミフィ・ロッテン、ナルキ・ゲルニ、メイシェン・トリンデン。

（フォンフォンのクラスメート。・・・こんなタイミングで）

レイフォンに対して理不尽な怒りが蓄積していく。

意図的にレイフォン達の会話をシャットアウトする。

（はあ。いったいわたしは何をしているのか・・・）

念威を回収し鍊金鋼を基礎状態に戻す。

気にしていても仕方ありません。今日はもう帰りましょう。

時刻は大体、午後の2時。今から帰ってもすることが無い。

どこかの喫茶店にでも寄って適当に時間を潰しましょう。

さて、そろそろ帰りますか。

フェリは席を立ち会計を済ます。「ありがとうございましたー」と言う声に背中を押されて店を出る。

カランカランと、店の扉が音を立てる。

「あれ、フェリ先輩」

数時間にわたって尾行をしていた対象が目の前にいた。

「・・・・・・・・」

「えーっと、何してるんですかフェリ？」

殆んど反射的にレイフォンを睨むと彼は慌てて言い直す。

「それはわざわざフォンフォンに報告しなければなりませんか？」

「いや、えっと・・・そんなことはないです。はい」

「特に何もしていません。ただブラブラしていただけです」

「はあ・・・・・・・・ツツツツ!!」

フェリは渾身の力でレイフォンの脛に蹴りをいれた。

「痛ッ、なにするんですかつ」

よほど痛かったのだろう。レイフォンが涙目で訴えてくる。

（いい気味です）

フェリは少しスッキリした。

「今日一日ずっと女の子と一緒にいた罰です」

「いや、それは関係な……ってなんでフェリが知ってるんですか？」

（しまった!?!）

「く、口が滑りました。」

「口が滑ったって事は……尾行でもしてたんですか!?!」

「別にいいじゃないですか。と言うよりフォンフォンがわたし以外の女の子と一緒にいるからいけないんです」

言っただとたんに大変な事を言っただことに気が付きつつむく。レイフォンに赤くなった顔を見られたくないからだ。

「はあ。なら、あの事も知ってるんですね」

何かを諦めたように言う。フェリが何故俯いているかは分かっているようにうた。

（……あの事?）

フェリが尾行していたのはレイフォンがメイシェン達に会ったところまでだ。それまでにレイフォンが言う‘あの事’にあてはまるような事は無かったはず。つまり‘あの事’とはそれより後でメイシェン達と何かあった、と言う事だろう。さつきまであった恥ずかしさが引いていく。

（しかし・・・）

メイシェン達に会ってから尾行していないので知りません。と言うのは何故か癪だ。

「ええ。とても悲惨ですね」

「ですよね・・・」

気になる。非常に気になるがああ言ってしまった以上、やっぱり知りませんと言うのには抵抗がある。こんな時自分のプライドが嫌になる。

「はあ」

「はあ」

二人の溜め息が重なる。

「あの、フェリの家まで送っていきましようか？」

レイフォンは寮、ではなく家、と言った。

（まあ、フォンフォンからしてみればわたしの住んでいる所は家

なんでしょうね)

「当たり前です。そろそろ暗くなるのにか弱い少女を放って置く
と？フォンフォンはそんな非常識人なんですか？」

「か弱い、ですか・・・」

レイフォンは自分の脛になんとなく視線を落とす。

「・・・何か？」

「い、いや。なんでも・・・」

「なんでもないなら帰ります」

「あ、ちよつと待ってくださいよ」

二人で帰路につく。元々レイフォンの寮はフェリの寮と方向が同じなので送っていくつもりがなくても途中までは一緒なのだ。

フェリの寮に着くまでの間、二人はたわいも無い会話をした。

わたしがフォンフォンと今日最後に言葉を交わした女の子。

そう考えるとなんだか気が楽になった。

「それじゃあまた明日」

いつの間にかフェリの寮に着いていた。

（もつとこの時間が続けばよかったのに・・・）

愚痴を言っても仕方ないが本気でそう思った。

「ではまた明日」

レイフォンが自分の寮に向かって走っていく。その背中が見えなくなるまでフェリは見ていた。

玄関で靴を脱いで中に入る。

どうやら兄はまだ帰ってきていないようです。

リビングの状態を見てそう結論付ける。

（都合がいいですね）

自分の部屋にはいり、電気を付ける。

ベッドの側まで行き大きな目の枕を手にとってバレーボールの様に上に投げる。

落ちてきたソレを右手で思い切り殴る。枕が壁にぶち当たる。

枕がやわらかかったのと、部屋の防音対策がしっかりしていた為、外に音は漏れなかった。

（いったい、あの事とは何なのでしょう？）

ベッドに落ちた枕にもう一撃加える。

（まあ、考えても仕方ありません）

シャワーで軽く汗を流し、髪を整えてベッドに入る。

（また明日にでもフォンフォンを絞める必要がありますそうですね）

フェリはそう決意し眠りに落ちる。

(後書き)

誤字、脱字があればどんどん言って下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1483m/>

彼女の嫉妬

2010年10月15日00時54分発行